五月十四日付書状

おろかなる心よと見る心より外にはなにの玉を見ましや

御状くはしく拝見仕候。北国へ御下向のよしうけ給候。めでたく侯。さりながら遠く御下り候へば身のため便りなくこそ候へ。兼又、能の事うけ給候。先日申候しごとく、為手御持ち候事ははやとくより印可申て候。是より上は、御心にて候べく候。三村殿、近江にての御能を一見申されて候。能か大に御なり候よし、申され候。目利にていられ候間、疑いあるまじく候間、御心安く候。さりながら、千聞も一見には如かず候間、御能を見申候て、落居をば申候べく候。はやはや御能に安堵の分は印可申候也。仏法にも、宗師の参学と申は得法以後の参学とこそ、補巌寺二代は仰せ候しか。さるほどに、御能ははや得法の見所は疑いなく候。手の事は、ただ大に、たぶたぶと、二曲三体の見聞を御心得べく候。なをなを、いかにもいかにも得法の後を、練り返し練り返し、功を積ませ給候べく侯。返返、宗師の参学を、御心に油断なく持たせ給候べく候。万事、御能を見申侯て申べく候。丹波にての御能よりは大に御なり候よし、御心にも覚えさせ給て侯よしうけ給候つる。又三村殿も一見申されて侯。又、さる人の河内にての勧進を見物申されて候も、褒美申され候。いかさまいかさま疑ひなく、御能は大になりたるかと覚え候。得法の事はもとよりの御事にて候間、かれこれ、成就かと覚えて候。さりながら、千聞も一見には如かず候べく候。御能を見申候て、治定の御返事申候べく侯。　　恐恐勤言

五月十四日　　世阿　花押

金春大夫殿御返報

春御方へまいる　申させ給へ

きやより　世阿